

# インドネシア・バリ島の聴覚障害児教育の現状と課題

笹谷 絵里

本調査は、インドネシア・バリ島にある、ブンカラ村の聴覚障害児教育と国の定める特別支援教育（聴覚障害児教育）を比較することで、インドネシア・バリ島の聴覚障害児教育の現状と課題を明らかにするものである。ブンカラ村では、「Kata kolok」という手話が使用され村人の多くが手話を使用できるとされた。だが、実際にはろう者同士でのコミュニティーが重視され、バイリンガルとされる人の多くが親族にろう者がいる人であった。教育現場でも、聴者と聴覚障害を持つ児童は一緒に教育を受けているわけではなかった。ブンカラ村の小学校でも国立特別支援学校の聴覚障害児教育も、教育の中心はSIBI（Indonesian Language Sign System）であった。だが、卒業後は地域の手話（Kata kolok など）やBISINDO（Indonesian Sign Language）が日常生活において主に使用されており、学校教育での手話の学びと日常生活で使用する手話に乖離があることが明らかになった。

キーワード：インドネシア、バリ島、インクルーシブ教育、聴覚障害児教育

This study compares education for hearing-impaired children in the village of Bengkala in Bali, Indonesia with the special needs education (education for hearing-impaired children) established by the national government in order to identify issues and the current state of education for hearing-impaired children in Bali, Indonesia. Many of the villagers in Bengkala are able to use a sign language called “Kata kolok” that is used in the village. There is, however, a focus on community among the deaf, and many of those who are considered bilingual, in fact, have relatives who are deaf. In places of education, hearing children and hearing-impaired children were not necessarily educated together. The focus of education for hearing-impaired children at both the elementary school in Bengkala and at national special needs schools was SIBI (Indonesian Language Sign System). After graduation, however, local sign languages (such as Kata kolok) or Indonesian Sign Language (BISINDO) were used primarily in daily life, revealing a discrepancy between the sign language used in school education and the sign languages used in everyday life.

Key words : Indonesia, Bali, inclusive education, education for hearing-impaired children

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

インドネシアのバリ島北部シガラジャの近くにあるブンカラ村では、約3000人の村人うち約1割の人々は耳が聞こえないとされる。だが、村人の9割が手話を話せ、学校でも全ての授業に手話通訳がつくとされる。ブンカラ村は村人すべて手話が使え、Kata kolok というローカルな手話が長年使

われている。そのため、日本のテレビ番組やニュースはもちろん、文化人類学、特別支援教育（インクルーシブ教育）、医学、社会福祉学、言語学などの様々な研究者が世界各国から訪れている現状がある。つまり、バリ島の小さな村でありながら、さまざまな人から注目されている。では、ブンカラ村においては、どのような教育が聴覚に障害を持つ子ども達に行われているのか。また、その教育の特色とは何であるのか、さらに、国の定める特

別支援教育（聴覚障害児教育）と地域の小学校での特別支援教育を比較することで、インドネシア・バリ島の聴覚障害児教育の現状と課題を考察したい。

## 1.2 インドネシア及びバリ島の概要

インドネシアは、17,500以上の島で構成されている島嶼国家である。人が居住している島々の数は6,000前後であり、それらの面積の合計は約70万平方キロ（陸地総面積の38%）となっている。インドネシアは、中国、インド、アメリカ合衆国に次ぐ世界第4位の人口規模を有している。国土には、300以上の民族が居住している。一方、全人口の70%近くは、国土の6%であるジャワ島に居住している。経済活動としては、西部インドネシア（スマトラ、ジャワ、バリ）が国家経済の約82-83%を占めており、東部インドネシアとの開発格差が存在している。また、ジャワ島とその他の地域の開発格差がある（国土交通省国土政策局2022）。バリ島はインドネシアの主要な島の1つであり、ジャワ島の東に位置する。島の人口は約390万人であり、面積は約5,561km<sup>2</sup>である。主な宗教はバリ・ヒンドゥー教で島民の9割を占める。他にイスラム教徒、キリスト教徒、仏教徒が存在する。バリの地域社会では、バリ・ヒンドゥー教に基づく慣習に従った生活が営まれている。民族はバリ人が大多数を占め、他にはジャワ人、華人とともにオーストラリア、ニュージーランド、日本からの外国人も多数住んでいる（インドネシア共和国観光省2022）。インドネシア中央統計省（Banda Pusat Statistik：BPS）の2010年の調査によると、バリ州の満2歳以上の人口は3,753,902名となっている。そのうち障害を持つ人は162,130名であり、障害を持つ人の人口比率は4.32%である（Badan Pusat Statistik2010）。バリ州における聴覚障害児のための施設は「特別学校」と総称されており、「特別養護学校」と「インクルーシブ教育校」の2種類がある。公立校の場合、小学校、中学校の管理費、運営費、授業料は無料であるが、制服や交通費等は個人負担となっている。学校運営に必要な経費は州や国からの補助金があり、私立校の場合は学校によって状況は異なっ

ている。バリ州には、聴覚障害児の教育機関は8校（公立4、私立4）あり、日本に類似している（木村・Desak2019）。このように、バリ州では、子どもの障害にあわせた特別支援教育が設置されるとともに、地域におけるインクルーシブ教育も実施されている。

## 1.3 ブンカラ村の概要

ブンカラ村は、バリ島北部のブレレン県の県庁所在地でオランダ統治時代に植民地政庁が置かれていたのが、シガラジャ（Singaraja）であり、ブンカラ村はシガラジャにある3000人規模の村である。遺伝性の聴覚障害を持つ村人が約1割存在するとされる。だが、村人の9割が手話を話せ、学校でも全ての授業に手話通訳がつくとされている。住民の約40人が主に遺伝による先天的聴覚障害をもち、手話を使用して生活している。そのため、ブンカラ村は村人のほとんどが手話を使うことができ、Kata kolokという特有の手話が長年使われているとされる。先行研究によると、ブンカラ村の聴覚障害者の多くが、DFNB3またはMYO15aと呼ばれる遺伝子の突然変異によって引き起こされた遺伝性の聴覚障害であり、婚姻によって子の遺伝が継承されている（Friedman et al 2000）。村の家系を確認した調査によると、この遺伝子の影響を受けた最初の人は7世代前に生まれたことが明らかになっている（Liang et al 1998）。村の中では、聴覚障害を持つ、ろう者同士の婚姻が多いため、村人の2.2%は先天的に聴覚障害を持っており、聴覚コミュニティのメンバーの17.6%もこの遺伝子を持っているとされる（Winata et al 1995）。このように小さな村であり、交通の不便な場所に村があり、さらに聴覚障害を持つろう者同士の婚姻が多いため遺伝性の聴覚障害を持つ方が増加したと考えられる。このように、バリ島のブンカラ村では、独自の聴者と聴覚障害者のコミュニティが形成されているとともに、独自の手話文化が発達している。

ブンカラ村で実施された、2000年の調査では、Bengkalaの聴者のうち、人口の少なくとも57%の人びとがKata Kolokを理解しており、手話を使用することができるかとされている。さらに、聴者の

熟練度はさまざまであるとされた (Marsaja 2008)。2011年の調査では、村人の57%がKata Kolokを使用でき、村の97%がバイリンガルであるとされている (DeVos 2014)。その理由として、Kata Kolokは簡単な手話であり、村の中に聴覚に障害を持つ方多いため自然と手話を使用する機会が増えること、また、家族の中に聴覚障害者(ろう者)がいることが多く、手話が身近なものである。さらに小学校で普通学級に聴覚障害を持つ子が在籍し、聴者と一緒に学んでおり、聴者の子どもも手話が理解できるためとされる。

このように、「村自体にろう者が多くいること」、「聴者の多くが手話を使用できること」について、土田まどかは、デフ・ゲイン (Deaf gain) という視点から考察している。デフ・ゲインとは、聴覚障害について、聴覚の喪失 (hearing loss) とはみなさず、「ろうを得た」 (Deaf gain) とみなすパラダイムシフトである。土田は、ブンカラ村の事例をデフ・ゲインとして、ブンカラ村ではろう者であることで、国際的なデフ・コミュニティへの参画につながっており、外国人ろう者との交流やろう者のダンス (janger Kolok) として村を有名にする一翼を担うことで、ろう者の視点からの新たな発見が未来へのリーダーシップにつながる契機になるとする。一方で、聴者の中でもネットワークに参画している場合もあれば、難聴であっても隣村に手話コミュニティにも音声コミュニティにも入れない青年の存在を指摘しており、「デフ・ゲインの特権的範囲を狭めれば狭めるほど境界領域の人びとの経験を取りこぼしてしまう」ことを指摘している (土田 2021)。このように、ブンカラ村自体がろう者の村として存在することで、聴覚障害者として、村に住むこと、聴者であっても手話ができることでそこの存在意義やメリットが存在することを明らかにしている。このように、従来であれば、マイノリティとしてデメリットになりうる可能性も、それはある側面からの考え方でしかないという点について、Friedner M and A Kusters はろう者の経験やろうの社会文化的意味を分析する際に、文化概念のような人類学からの分析やカテゴリーが生産的であることを見出してきた。しかし、我々が指摘するように、ろう者の

経験に関する学問はますます多様化している (Friedner and Kusters 2020) とするように、ろう者だから聴者だからという固定概念にとどまらない状況も指摘されている。

では、これらの先行研究から、実際に聴覚障害児への学校教育の内容はどのようなものなのか、さらに、バリ島において聴覚に障害を持つ子どもを含めた子ども達への教育がどのようなものかについて、ある意味、聴覚障害児として聴者と分けられた環境で学ぶ、国の定める特別支援教育 (聴覚障害児教育) と聴者と一緒にインクルーシブ教育として学ぶ、地域の小学校 (ブンカラ村) での特別支援教育から明らかにしたい。

## 2. 研究方法

インタビュー調査及び参与観察の概要は以下の通りである。調査時期は2019年1月20日から2月1日までの11日間である。バリにある特別支援学校 (聴覚、自閉、知的など) (SLB Negeri 1 Badung (ジンバラン国立特別支援学校)) およびインドネシアのバリ島にあるブンカラ村 (シガラジャ) にある小学校を訪問し実施した。インタビュー対象者について、ブンカラ村では、小学校教員、村人、聴覚障害を持つ当事者へのインタビューを実施した。バリにある特別支援学校では、校長および教員数名にインタビューを実施した。

倫理的配慮として、日本社会福祉学会の倫理指針を遵守した。被調査者に対して事前に研究の概要を説明し、個人情報保護等の取扱いに関する説明をインドネシア語 (通訳を介して) で実施した。同意を経たのちに、「立命館大学における人を対象とする研究倫理指針」に従ってインタビューを行った。

## 3. 調査結果

### 3.1 ブンカラ村の状況

ブンカラ村に入ると日本でいう村役場があり、そちらに案内された。そこには、寄付 (donation) の箱と寄付した方のメッセージが記述されており、村を訪れた人の多くが寄付していることがわ

かった。調査者も寄付を実施した。その後、村役場の方が村の長（村長ではない）Kさんに連絡をし、村役場までその方が来てくれた。その後、村や学校に案内して話をしてもらった。Kさんは村で英語が話せる唯一の人物とのことであった。Kさん本人がそのように話しており、実際に他の村民の方と話しても英語は話せず、インドネシア語での会話が主となった。ろう者の方は、Kata Kolokを使用し会話していた。そのため、主に欧米や北米の研究者や村を訪れて研究するときはKさんが通訳していると語られた。Kさん家族にはろう者がおり、Kata Kolokも理解できる為、村民との通訳、村民（ろう者）との通訳も担っていた。

Kさんの話によると「ここでは差別がない」と語られ、「ろうの子が生まれるか、ノーマルの子が生まれるかは神様が決めている。ブンカラのユニークは聞こえることだ」と話された。さらに、「すべての外から来る人を歓迎する」として、村の外から来る障害を持つ人たちはもちろん、国外の障害を持つ当事者、研究者の受け入れも行っている話があった。



図1. BENGKALA（ブンカラ）村の入り口

例えば、「ベルギーから来たろう者のスウェンさんというろう者が、村に滞在し、Kata Kolokを学んで帰っていった」や「精神障害を持つ人が来ても受け入れている」とのことであった。ろう者の場合、村のろう者を紹介し、一緒に過ごせるようにしているとの配慮が語られた。ベルギーの手話とKata Kolokでコミュニケーションが取れるのかとの調査者の質問に対して、「Kata Kolokはシンプルでシンプルでわかりやすく、多くに人が簡

単にボディーランゲージのように使えるので覚えやすい」と話された。

村内を歩くと研究者らしい人や観光客のような方もおり、実際に話すことと隣の大学で学んでいるインドネシアの学生の卒業論文の調査、フランスのカメラマン、さらに、日本からも博士課程の院生が長期滞在し調査を実施していた。このように、村人以外の人も多く滞在しており、観光地とまではいかないが、村人の方も住んでいるろう者の方も外から来たものに対して寛容でフレンドリーに声をかけてくれる土壌が存在した。一方で、ブンカラ村からほど近いシガラジャ（都市部）よりもやや物価は高く感じられ、食事や宿泊費等を尋ねると1.5倍から2倍程度の値段が提示された。

### 3.2 ブンカラ村のろう者

ブンカラ村では、村内のろう者は、同じ部落に住み、ろう者同士でコミュニケーションをとる傾向があることが明らかになった。先行研究や日本国内で伝えられているブンカラ村の情報では、「村人の9割が手話を理解し、学校でも全ての授業に手話通訳がつく。ブンカラ村は村人すべて手話が使え、Kata kolokという手話が長年使われている」とされていた。しかし、実際は村人の9割が手話を使用できるのではなく、あいさつ程度の手話が理解できる聴者の村民が9割であり、Kata kolokを使用して会話が可能とされる聴者の村人の多くは、親族にろう者がいるものがほとんどであった。K氏も家族にろう者がいたため、Kata kolokが使用できるとのことであった。そのため、ろう者はろう者で同じ地域に住み、ろう者同志で主としてコミュニケーションを取り、情報共有している様子がかがえた。一方で、ろう者同志のコミュニティに限定して生活しているわけではなく、調査者が村を歩いていても肩をたたいてくれ、Kata kolokで積極的にコミュニケーションを取ってくれた。さらに、何度も述べられているようにKata kolokは簡単な手話であり、ボディーランゲージも多く、手話を知らない人間にも理解しやすく、簡単な手話でのやり取りで十分会話が可能であった。実際にろう者の村民の方に声をかけていただきお宅にお伺いする機会があった。その内容につ

いて、事例として紹介したい。

### 事例1

Iさん家族は家族全員がろう者で夫婦と娘二人とのことであった。家族全員がろう者であり、娘二人はろう者のダンス（バリ舞踊）を習っており、村外での発表も積極的に行っており、親として誇りに思うと話された。家族は笑顔でフレンドリーであり、山で取ってきたミカンをふるまってくれた。さらに積極的に村に宿泊していかないと何度も誘ってくれたが、村外に宿泊場所が確保できていると告げると少し落胆した様子があった。

娘さんの1人は中学生の年齢であったが中学には通っていないように話された。また、小学校に関して規定の年数よりも長く通っていたとのこと「やっと卒業した」とほっとしたように話された。Iさんの家族の仕事は村の仕事を担っているとのことであったが具体的な仕事の内容については語られなかった。

Iさん家族のように、外から来た研究者や観光客を積極的にもてなし、歓迎するという事は村では当たり前の事のようにであった。また、観光客を村民の家に泊めるということもよくあることで、通訳をしてくれた日本人研究者も前述のKさんの家に宿泊していた。さらに、後に調べたところ、インドネシアには留年制度があり、一定の基準に達していない場合は同じ学年で再度学ぶことがあるとのことであった。ろう者の場合も聴覚に障害があるという点で基準に達することが難しい可能性が考えられた。さらに、村の小学校ではろう者に対して積極的な受け入れを行っている一方で、中学校が村にはないため、ろう者を受け入れてくれる中学校への進学や宿舎のある学校へに進学が必要となり、小学校卒業後の選択肢が限られている可能性が考えられた。ろう者の仕事についても何かの定職についているろう者もいるとのことだったが、村の仕事を請け負っている場合や自営業で生計を立てている様子がうかがえた（土田2021）。

(Iさん家族との会話はKata kolokと筆談(インドネシア語)で書かれたインドネシア語をインドネシア語が理解できる長期滞在の日本人研究者が

訳すという形で実施されたため、不十分な情報も含まれる。)

このように、ブンカラ村でろう者は受け入れられ、差別を感じる事なく生活している様子が見受けられた。さらに、村外から来る人々や国外から訪れる研究者や観光客にも寛容であり、受け入れられる土壌があった。一方で、研究者や観光客の対応をする中心人物がKさんであり、英語も話せるKさんの話が村全体の話として知られている可能性も考えられた。実際には、村人の多くはKata kolokを理解しているものの、使いこなしているわけではなく、あいさつ程度のKata kolokができるという事であった。さらに、ろう者もろう者同士でコミュニケーションを取っていることが多いことが、ろう者自身から語られた。では、学校での教育はどうなのか、ブンカラ村の学校教育について見てみたい。

### 3.3 ブンカラ村の小学校

ブンカラ村の小学校についてみると、学校には制服があり、各学年とクラスごとに分かれて授業が実施されていた(各学年1クラス程度で見学した6年生の教室には30人程度の児童が在籍していたが、学校関係者に学校全体での児童のについて明確な回答は得られなかった)。休み時間には校庭で子どもたちが遊ぶ様子が見られた。購買も設置され地域のローカルなお菓子や駄菓子なども子ど



図2 ブンカラ村の学校



図3 学校の校庭（奥が講堂となっている）

もがお小遣いで買える値段で販売されていた。算数の授業の様子を見ると、黒板に先生が問題を書き、子ども達が回答し、できた人が手をあげるという日本の学校と同様の授業方法が実施されていた。村の子ども達の半数程度は放課後に塾に通っているとのことで教育レベルは高いようであった。実際に放課後に塾から帰ってくる子どもたちを見かけることもあり、向こうから声をかけてくれることもあった。

聴覚障害児教育について目を向けると、学校の中には手話に関するアルファベットを示したポスターが張られており、小学校全体が聴覚障害を持つ児童を支えるインクルーシブ教育を推奨していることがKさんから話された。次に、聴覚に障害を持つ子どもたちを教えているW先生に話を聞くと、現在、村の小学校に在籍している聴覚障害を持つ児童は3名で、村に住んでいる児童は1名のみであり、他の2名は村外から通学していた。先行研究では、聴覚に障害を持つ児童も手話通訳によって聴者の児童と一緒に授業を受けているとのことであったが、通常は聴者と聴覚障害を持つ児童は分かれて授業を受けており、一緒に授業を受けているわけではなかった。

授業は主に家族に聴覚障害のある人を持つW先生が実施しており、教室ではなく、教室の外にあるテーブルで実施していることが多いとのことであった。W先生の話によると、学校で聴者障害を

持つ児童の授業ができるのはW先生のみであり、3人とも学年が違う事、また、聴者とうろう者では学ぶスピードが異なり、一緒に授業に参加することには困難が伴うとのことであった。授業の休み時間には聴者の子ども達が3人の周りに集まってきて簡単な手話でコミュニケーションを取っている様子が見られ、3人に笑顔が見られた。聴者の子ども達に話を聞くと手話について学校で習っているので簡単な手話は分かることと、ジェスチャーで十分やり取りができるとのことであった。きょうだいや親族にろう者がいる子はKata kolokを理解しているため、手話でスムーズに会話している様子が見られた。村外からきている2人は約1時間かけて学校に通学しているとのことであった。聴覚に障害を持つ児童の1人で最年少のRさんについて事例として紹介したい。

## 事例2

Rさんは低学年（他の2人は高学年）で、笑顔が印象的で、調査者にも積極的に手話で話しかけてくれる明るい子である。おしゃれが大好きで、いつもかわいい花などの髪飾りをつけていた。Rさんは、ブンカラ村から1時間程度離れた場所に住んでおり、父親と一緒にバイクで1時間程度かけて学校に通学しているとのことであった。父親の話によると、通学には父親が付き添っているため、父親の仕事のある時や天候によっては学校に来ることが出来ないとのことであった。Rさんは生まれたときから耳が聞こえず、地域の小学校に通学することが難しく、子どもにできるだけの教育を受けさせたとの父親の思いから聴覚障害児教育を実施しているブンカラ村の小学校に入学したとのことであった。学校で学べていることに感謝していると何度も話された。現状には満足しているが、この学校を卒業した後のことが心配だと語られた。

Rさんと同様に村外から通学しているAさんも1時間程度離れた場所から通学しており、母親が送迎しており、1人で通学するというのは両者ともに難しい状況であった。実際に、シガラジャ周辺はもちろんバリ島自体、公共交通機関が発達しているわけではなく、子どもをバイク送迎している様

子が見られた。そのため、地域の学校に通う以外の選択をした場合親の送迎は必須であり、バイクといった送迎に使うことが出来る乗り物があること、また、子どもに教育を受けさせたいという親の意思により、子どもが受けられる教育に差があることがわかった。さらに、前述のように小学校を卒業後の進学先が限定されるため、村外の学校から通学していることも含め小学校卒業後の進路をどうするのが懸念事項になっていた。

授業の内容について見ると、学校に掲示されている手話のポスターも学校で教えている手話も SIBI (Indonesian Language Sign System) や BISINDO (Indonesian Sign Language) が中心に教えられており、村の中で主に使われている「Kata kolok」は学校では教えていないとのことであった。そのため、村内での唯一の通学者である I さんは学校では、SIBI を習い、家では Kata kolok を使っているという学校での学びと生活での違いが語られた (I さんは家族にろう者を持つ)。

同様に、ブンカラ村ではろう者のバリ舞踊が有名であり、シガラジャはもちろんバリ島も含めてインドネシア全体で高い評価を得ている。小学校においても土曜日はバリ舞踊を練習する日となっており、村外者も含め誰でもが参加することが出来るようになっていた。だが、この練習には聴覚に障害を持つ子は参加しておらず、別に、ろう者のみで練習しているという事であった。小学校に通学している子のほとんど (女子のみ) が参加しており、バリ舞踊の修得状況はさまざまであるとのことであったが練習に参加していた。聴覚に障害を持つ子も含めたろう者が練習に参加していないことを質問すると、聴者とうろう者ではバリ舞踊の練習方法はもちろん耳が聞こえないため、バリ舞踊の習い方や舞踊の理解の仕方が異なるため一緒に練習できないとのことであった。実際に練習の方法を見ると聴者は音楽を流して踊の型を覚えていくという練習方法がと取られていた。一方で、ろう者のバリ舞踊ではおどりの型を覚えた後に音楽に合わせていくという方法が取られていた。

このように、学校の中で子どもたちは一緒に楽しく過ごしている様子がうかがえた。一方で、授

業はもちろんバリ舞踊の練習は聴者とうろう者では分けられていることが明らかになった。Kata kolok についても、学校の授業では SIBI (Indonesian Language Sign System) や BISINDO (Indonesian Sign Language) が教えられており、授業において Kata kolok を学んでいることはなかった。聴者の子ども達も授業の中では上記の2つを習っており、習った手話や筆談等で会話しているとのことであった。Kata kolok については、村に住んでいるため自然と簡単な Kata kolok については取得でき、使用しているとのことであった。聴覚に障害を持つ子どもたちも村に住む子よりも村外から通学していることの方が多く、1時間程度かけて親と通学していた。村に住む聴覚に障害を持つ子も、学校で習う手話は家で使う手話 (Kata kolok) と異なり、学校と家で使い分けていると語られた。先行研究では、すべての授業に手話がつきインクルーシブ教育が実践されているとされたものの、実際には、聴者とうろう者は分けて授業を受けており、バリ舞踊といった課外活動も別々であることがわかった。だが、子どもたち同士は耳が聞こえる / 聞こえないという差はなくお互いにコミュニケーションを取りながら楽しく過ごしており、その点において、インクルーシブ教育は実践されており、成功しているともいえる。課題として、卒業後に聴覚に障害を持つ子を受け入れてくれる進学先が限られるため、中学に進学していない子もおり、ブンカラ村でできることと、さらに大きな行政組織での支援や政策が必要であると考えられた。では、ブンカラ村のようなローカルなコミュニティではなく、インドネシア政府が設置している国立の学校ではどのような聴覚障害児教育が実践されているのかバリ島の都市部であるジンバランあるジンバラン国立特別支援学校における教育を見てみたい。

### 3.4 SLB Negeri 1 Badung (ジンバラン国立特別支援学校)

ジンバラン国立特別支援学校 (SLB Negeri 1 Badung) は、バリ島の都市部で観光地も近い、町の中心部に設置されている国立の特別支援学校である。幹線道路に面しており、学校の通学には保

護者の送迎が必須となっている。

学校では、M 校長先生（聴者）と英語が堪能とのことで教員 A さん（聴覚障害児教育を担当、聴者）に校内を案内いただいた。校長の M 先生の話により、この学校はインドネシア政府によって設置されており、国の基準に基づいた教育を実施しているとのことであった。学校に規模についてはバリ島内においては最大級とのことであったが、在籍人数について、明確な回答は得られなかった。学校自体は7:30 から始まり、各児童生徒の状況に応じて11:30、13:30、15:30 まで授業が実施されているとのことであった。授業の時間については、学校に慣れることや各児童・生徒の体調に合わせて時間が設定されており「step by step」を大切にしていると語られた。通学している児童・生徒の障害としては、知的障害（自閉症含む）、聴覚障害の児童生徒であり、視覚に障害を持つ子は同じバリ島にあるデンパサールの学校に通学しているとのことであった。

国立の学校であるため、教員はインドネシアの伝統的な衣装を制服として身に付けて働いていた。さらに、バリ島の中でも教育水準が高いとのことで PC などの操作技術の取得にも力を入れているとのことであった。音楽の授業では、聴覚に障害を持つ生徒（日本だと中学生のクラス）がバリの伝統音楽をリズムや音階といった特別な方法で学ぶ授業が実施されており、調査者に対して伝統的な音楽を演奏してくれた。演奏は、耳が聞こえていないとは思えないほど正確で、何度か聞いたことがある聴者の演奏と変わらないものであった。教員に確認すると、生徒のほとんどがほとんど聞こえないかわずかに聞こえる程度であり、音楽の詳細な音は聞こえていないとのことであった。正確な音が奏でられるには指導方法にポイントがあり、生徒たちも理解が早い子が多いためレベルの高い演奏が実施できているとの事であった。

学校での教育を見ると授業は SIBI (Indonesian Language Sign System) で行われており、SIBI を学ぶことが国の方針であり、国内だけでなく、国外でも通用する教育を行うとの目的で教育が実施されていると語られた。一方で、学校の教育では

SIBI を中心に教えているものの、学校を卒業すると地域の手話を使うことが多いとされた。さらに、家族にろう者がいる場合は家でも手話を使っているが家族が SIBI を使えない場合もあるため、教員は複数の手話を理解し、指導する必要があると語られた。A 先生に対して、多岐にわたる手話の理解は大変ではないかとの質問した所、回答として、例えば、朝という手話でもそれぞれ違いがあるが基本的に、「日が昇る」「窓を開ける」「枕を取る」などある程度共通した「朝」をイメージした動作があるため、1つの手話を理解していると相手の手話を見ても推測できるとのことであった。また、相手も手話を使っている人であれば動きから意味を推測できると話された。

卒業後の進路についても国からの支援があるため、ある程度スムーズにさまざまな分野に就職しているとのことであった。インタビュー中も卒業生であると紹介された青年がおり、手話で丁寧な挨拶をしてくれた。彼も制服として、伝統的な衣装を身に付けており、事務を仕事としていると自己紹介してくれた。

このように、ジンバラン国立特別支援学校 (SLB Negeri 1 Badung) では、インドネシアの国やバリ島という州の政策によって教育が実施されているため、綿密で高度な教育が実施されていることがわかった。教員も児童生徒もバリの伝統的な衣装が制服であり、授業や施設の設備においても随所にインドネシアらしさやバリ島らしさを感じられるものとなっていた。学生の選抜については明確に述べられることはなかったが、希望者全員を受け入れているようではなかった。設備や授業内容、教員の質の高さを鑑みても質の高い教育が実施されていることが見受けられた。インドネシアらしさやバリ島 (バリ州) らしさが大切にされる一方で、手話については SIB が教育の中心となっており、学校教育の場での学びと日常生活で使用される手話が異なることから児童生徒は学校では SIBI を使用し、生活場面では地域の手話や BISINDO (Indonesian Sign Language) を使用していることが明らかになった。さらに卒業後は地域の手話や BISINDO が生活の中心になることも少ないことも示された。加えて、家族が SIBI を知らない / 取



得していないことが少なくないため、教員が複数の手話を取得し家族と話をすることが明らかになった。

#### 4. まとめ

本調査報告では、インドネシアのバリ島（バリ州）における聴覚障害児への学校教育の内容はどのようなものなのか、さらに、バリ島において聴覚に障害を持つ子どもを含めた子ども達への教育について、国の定める特別支援教育（聴覚障害児教育）と聴者と一緒にインクルーシブ教育として学ぶ、地域の小学校（ブンカラ村）での特別支援教育での違いを明らかにすることを目的に実施した。

ブンカラ村の状況を見ると、ブンカラ村でろう者はもちろんすべての人が受け入れられ、差別を感じる事なく生活していた。加えて、村外・国外から訪れる研究者や観光客、移住者にも寛容であり、受け入れられる土壌があった。一方で、先行研究ではほとんどの村人がKata kolokを理解し使用しているとされたが、実際には、多くの村人はKata kolokを使いこなしているわけではなく、あいさつ程度のKata kolokができるという事であった。さらに、ろう者もろう者同士でコミュニケーションを取っていることが多く、住むところもろう者同士で居住していることが多いことが明らかとなった。

次に、ブンカラ村の小学校教育について見ると、学校の中で子どもたちは一緒に過ごし、楽しそうな様子がうかがえた。一方で、授業やバリ舞踊の練習は「聴者」と「聴覚に障害を持つ児童」は分けて授業を受けたり、練習を行っていることが明らかになった。Kata kolokについても、学校の授業ではSIBI (Indonesian Language Sign System) や BISINDO (Indonesian Sign Language) が中心に教えられていた。

村の小学校に在籍している聴覚に障害を持つ児童は3名であり、村内に居住している児童は1名のみであり、2名は村外からの通学者であった。村外から通学している児童は、1時間程度かけて親と通学していた。村に住む聴覚に障害を持つ子ども、学

校で習う手話は家で使う手話（Kata kolok）と異なっていた。先行研究では、すべての授業に手話がつきインクルーシブ教育が実践されているとされたが、実際には、聴者とろう者は分けて授業を受けており、バリ舞踊といった課外活動も別々であった。だが、子どもたち同士は耳が聞こえる/聞こえないという差はなくお互いに可能なコミュニケーションを取りながら楽しく過ごしており、その点において、インクルーシブ教育は実践され、成功しているといえる。課題として、卒業後に聴覚に障害を持つ子を受け入れてくれる進学先が限られ、中学に進学していない子もおり、聴覚に障害を持つ子の親の不安要素になっていた。

最後に、ジンバラン国立特別支援学校では、さまざまな障害を持つ児童・生徒が同じ敷地内で学びその子に合わせた学び方ができる実践がなされていた。学校は、インドネシアの国やバリ島という州の政策によって教育が実施されており、高度な教育が実施されていた。学校教育では、手話についてSIBIという国際的な手話が教育の中心となっており、学校教育の場での学びと日常生活で使用される手話が異なることから児童生徒は学校ではSIBIを使用し生活場面では地域の手話やBISINDOを使用していることが明らかになった。このように、ブンカラ村の小学校での聴覚障害児教育もジンバラン国立特別支援学校の聴覚障害児教育も教育の中心はSIBI (Indonesian Language Sign System) であり、国の方針に基づいた教育が実施されていた。しかし、卒業後は地域の手話（Kata kolok など）やBISINDOが日常生活において主に使用されていることが明らかとなった。さらに、学校教育で学んでいるSIBIを日常生活で使うことが少ない事や親世代がSIBIを知らない、取得していないこともあり、学校教育での手話の学びと日常生活で使用する手話に乖離があることが明らかになった。

本調査はインドネシア語や手話、筆談を通訳を介して実施していること、さらに英語を母語としない者同士での英語の会話を中心にインタビューや参与観察を実施したものである。そのため質問者の意図や回答者の意図が正確に反映できていない点は否めない。だが、インドネシア・バリ島の

聴覚障害児教育の現状と課題を明らかにする調査資料の一助になればと考えている。

## 謝辞

研究の趣旨を理解し、調査にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

## 付記

本稿は日本社会福祉第67回秋季大会及び日本社会福祉第68回秋季大会での発表内容に大幅な加筆修正を行ったものである。

## 引用文献

- Badan Pusat Statistik (2010) (Central Bureau of Statistics), statistik Indonesia.
- SLB Negeri 1 Badung (ジンバラン国立特別支援学校) (<https://slbn1badung.sch.id/20220620> 取得)
- 各国の国土政策の概要 インドネシア 国土交通省国土政策局 (<https://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/international/spw/general/indonesia/index.html20220620>)
- インドネシア共和国観光省公式ページバリ島 (<https://visitindonesia.jp/enjoy/information/02.html20220623>)
- 木村あい・Desak Made Wihandani (2019) 「インドネシア、バリ州の聴覚障がいのある子どもの施設 SLB A NEGERI DENPASAR について」『神戸女子大学健康福祉学部紀要』11、107-110.
- DE VOS, Connie, 2014. 'Absolute spatial deixis and proto-toponyms in Kata Kolok'. InAnthony JUKES, ed. Deixis and spatial expressions in languages of Indonesia. NUSA56: 3-26.
- Friedner M and A Kusters. 2020. Deaf Anthropology. In Annu. Rev. Anthropol. 49:31-47.
- Friedman, T.B., J.T. Hinnant, R.A. Fridell, E.R. Wilcox, Y. Raphael, & S.A. Camper.2000. DFNB3 families and Shaker-2 mice: mutations in an unconventionalmyosin, myo 15. Advances in Oto-Rhino-Laryngology 56, 131-144.
- Liang, Y., A. Wang, F.J. Probst, I.N. Arhya, T.D. Barber, K.S. Chen, D. Deshmukh, etal. 1998. Genetic mapping refines DFNB3 to 17p11.2, suggests multiple alleles ofDFNB3, and supports homology to the mouse model shaker-2. American Journalof Human Genetics 62 (4). 904- 915.
- Marsaja, I. G. 2008. Desa Kolok - A Deaf Village and its Sign Language in Bali,Indonesia. Nijmegen: Ishara Press.
- 土田まどか (2021) 「バリ島手話共有コミュニティにおけるデフ・ゲイン」日本文化人類学会研究大会発表要旨集.
- Winata, S., I.N. Arhya, S. Moeljopawiro, J. T. Hinnant, Y. Liang, T.B. Friedman, & J.J.Asher. 1995. Congenital Non-Syndromal Autosomal Recessive Deafness inBengkala, an Isolated Balinese Village. Journal of Medical Genetics 32 (5), 336-343.